

# シュンペーター教授の一生

—ハーヴァード大學教授會記録—

**はしがき** 本篇は去る2月7日、ハーヴァード大學聯合教授會の席で公式に記録にのせられたものの翻譯である。シュンペーター夫人から特に本誌のために送られたものである。(編集部)

1950年1月8日に、コネティカット州タコニックにおいて他界したジョセフ・アロイス・シュンペーターは、彼の世代の指導的經濟學者の中でも屈指の人であり、かつ本學中異彩の一人であった。かれの博識は廣大というのみではならず、その關心においても業績においても、決して經濟學の分野だけには限られていなかった。かれがハーヴァードにおいてすごした18年間は、たゆみなく烈しい智的活動によって埋めつくされ、それは、かれの同僚、數百の學生、ないしはかれが専門とした分野にたいして、永しえに消えぬ印象をのこしたのである。

シュンペーターは、1883年に、いまはチェコスロヴァキアの一部であるモラヴィアのトリージュに生れた。かれは生後まもなく父を失い、その少年時代をウィーンですごした。そして、當時オーストリー貴族の子弟を相手とした有名なテレジアヌム學校にかよい、すすんではウィーン大學において、1906年、法學博士の學位を得るにいたったのである。ハプスブルグ帝國の末期であった當時においては、ウィーンはこの世においても最も快適な都の一つであったにちがいない。わけでも、その育ちと天分に恵まれたものにとってはそうであつたらう。シュンペーターはそのいずれにも恵まれていた。そしてかれは、この與えられた機會を最大限度に生かしたもののようである。その後かれは、この上なくコスモポリタンの人となったけれども、ウィーンにおけるこの初期の經驗は、ついにかれの心を去ることはなかった。最後までかれは古い傳統にそまった教養あるオーストリー紳士としてすごし、したがって、すべてに眼をひらきながら、しかも1914年以後の轉變の中に何等進歩の證左を見出すことのできない一人だったのである。

大陸の大學では慣例であるが、當時ウィーンにおいて

は、經濟學は法學部の一課目であつた。世紀の變り目のころ、ウィーンはおそらく經濟學研究において世界の指導的中心であつたと云えよう。かくしてシュンペーターは、當時もっとも卓抜した學者の中に數えられたメンガーとベエム・バーヴェルクを、かれの師としたのである。かれは大學を出てから2年間、カイロにおいてエジプトの國際混合裁判所で法務に従事したが、まもなく1908年、かれは *Wesen und Hauptinhalt der Theoretischen Nationalökonomie* を公けにすることによって、經濟學をもつてかれの研究分野とすることを明らかにした。かれが25歳になるかならぬかで、世に出たこの著書は、かれの名聲をただちに確立してオーストリー經濟學者少壯グループ中の唯一というにいたらしめ、結局チェルノヴィツツ大學における教授への途をひらいたのである。

チェルノヴィツツは、今はソ連領土内のブコヴィナにあるが、オーストリア=ハンガリーの大學中でも、もっとも東に位するものであつた。げにチェルノヴィツツは「東方的」であつたにちがいない。本學の同僚たちはシュンペーターから、その當時のことについて、アラビアン・ナイト物語の一片かともまごう實話綺譚のかずかずをきかされたものである。1911年に、かれはグラーツ大學に招かれ、そこでかれは第一次世界大戰中をすごした。かれの有名な *Theorie der Wirtschaftliche Entwicklung* は1912年に出版されている。

シュンペーターの初期の勞作は、主として靜態的前提の下に經濟學的分析を發展させ、かつ精緻化したものである。これにたいして『經濟發展の理論』は、經濟的變化の過程にかんする開拓者的な仕事であつた。晩年になってシュンペーターは、人の智的勞作は三十歳までの業績によって通常きまってしまう、と語るのを常としていたが、これはかれほどに早成のほまれをもたぬかれの同僚たちにとっては、やや前途の望みを失わしめる宣告であつたと云わなければならぬ。シュンペーターが『經濟發展の理論』を公けにしたのは、29歳の時であつた

が、その時以後のかれの學問的偉業の大部分は、かれがその時まですでにその骨格を描きだしていた思想の肉付けないしは發展をあらわすものであった。新機軸導入者、ないしは經濟的變化の擔い手としての企業家にたいするかれの考え方、きわだって鋭い、しかし議論の餘地のあるかれの利子理論、企業新機軸の所産としての、かつ新機軸と經濟發展過程との關係をあらわすものとしてのかれの景氣循環理論、さらには、資本主義の生成とそのきたるべき衰退とにかんするかれの考え方など、いずれも初期の勞作の中で、あるいはすでに語られ、あるいはすでに暗示されたものである。

1913年に、かれはコロンビヤ大學へのオースタリーからの交換教授として、はじめて米國を訪れ、同大學から名譽學位を授與された。かれは大戦のはじまる直前かれの祖國に還ったのだが、戦争中はすすんで政治に參與するというをしなかつた、かれはその感情において、オースタリー政府内または王廷内における少數派であった反ドイツ派の人たちに味方した。これも、いかにもかれらしい點である。一生を通じて、かれはいつも少數派の一人であったということさえできる。殊に問題の性質上、多數派の意見が國家主義的または排外的な愛國主義の立場であると見なされるときには、なおさらそうであった。1928年に、本記録執筆者の一人がボンにシュンペーターを訪ねたとき、かれは、フランス人占領下におけるライン諸都市の行政ぶりは知るかぎり今までのうち最善のものであった、という意見を何のはばかりもなく述べて、ひとを驚かしたものである。かかる意見は、當時その付近において、決して俗受けのするものではなかつたのである。第二次大戦の時にもまた、かれは少數派の一人であった。こんどはそれが、かれの第二の祖國となった國の國家政策にかんしてである。おそらくは、第二次大戦中の數年間は、かれの生涯を通じてもっとも暗うつな時期の一つであったと思われる。一つには、この國の政策に同調するをえず、一つには、多くの友人との接觸をうしない、シュンペーターは、かれが西歐世界において價值ありと見なした多くのものが衰滅してゆくのを悲しくも見守りながら、みずからの學問分野の仕事に沈潜してしまつたのである。

シュンペーターの生涯の大部分は、ほとんど學問と教育とにささげられた。しかし第一次大戦の直後、かれは短期間ながら政治への横道へはいっており、最初ベルリンにおける社會化審議會の専門委員として、ついにはオースタリーの最初の共和國政府の大藏大臣としてつとめている。ひとに與えた印象では、シュンペーターは政治生活も、また政界におけるかれの同僚たちも、いずれ

をも好まなかつたようだ。事實、ずっと後になって、かれはケインズ卿の政治的同僚たちを指して、「あの政治屋という手におえない野獸」という言葉を使っている。政界への横道につづいてかれは、さらにあのオースタリーの通貨インフレーションの時期——それは金融的價值だけでなくその他の價值あるものをも破壊しつつあつた時期——に、事業にのりだして、不幸なる經驗をなめたのである。

1925年にシュンペーターは、ふたたび學界にかえって、ラインのボンで經濟學の教授となつた。1927年にはハーヴァードに遊んで一年間だけ客員教授となり、1931年には重ねて本學を訪れ、ついにその翌年本學正教授の中に數えられるようになったのである。ボンの教授に就任して以來、かれの死にいたるまでの25年間は、まさに、かれにとっては、第二の驚嘆すべき生産期であつた。かれの筆からは毎年、流れるように論文の發表が續いた。またかれは、同僚たちの追隨をゆるさぬ美しさと力強さをもつて英語を使うことのできた人である。1939年にかれの大著 *Business Cycles* 上下2巻が公刊され、1942年には、多くの示唆と影響力に富む *Socialism, Capitalism and Democracy* が公けにされた。晩年の最後には、かれは經濟思想史をほとんど完成していたが、かれの同僚たちの意見では、これこそはこの分野における傑出した勞作としていつまでも残るであろうと見られている。夫人エリザベス・ブーディー・シュンペーターは彼女自身經濟學者の列につらなる人であり、その結婚生活12年間にわたって、理解と愛情とにより、かれの教育ならびに學問での業績にきわめて多くを貢獻した人であるが、シュンペーターの遺稿のうちから、なお多くのものを再生される豫定であるときく。

ハーヴァードにおけるかれの生活は、國際的名聲ある學者としてのそれであり、かれは内外いずれもの同僚または學生から、たえず意見を求められていた。かれは *Econometric Society* の創設者の一人であり、1937年から1941年にわたつてその會長をつとめた。かれは經濟學における精密方法の利用を強く支持した學者だつたのである。1948年に、かれは *American Economic Association* の會長となり、さらに死去の直前、新設された *International Economic Association* の初代會長にえらばれていた。

シュンペーターは、底知れぬ精力の人であつたようだが、同時にその精力を惜しみなく使つた。かれは常に學生の面接にこたえていたし、また世界のあらゆる部分から集まる少壯學者に助言と指導を與えるため、多くの時間を喜んでさいたのである。惜しみなく自らをひとに捧



げるこの態度は、あるいはかれの死を早からしめたのであったかも知れない。ニューヨークで開かれた經濟學會の會合からコネティカットの閑居にかえり、近くシカゴ大學で行うはずであった一連の講義の準備にとりかかっていたのだが、かれはやすらかに眠りの中でこの世を去った。しかし、かれとても、あるいはかれの友人たちとても、かれのこの生涯の何をか變えよう。脉うつ活力こそかれのものであったし、またその惜しめない消盡こそかれらしい生き方あった。

- G. ハバラー
- S. E. ハリス
- W. W. レオンティエフ
- E. S. メーソン (委員長)

編輯部付記——本記録の中に言及されている遺稿『經濟學說史』は、*History of Economic Analysis* と題し、Allen and Unwin から、出版の豫定である。夫人によれば、全體はほぼ完成され、その大部分はすでに教授の生前にタイプされており、タイプ用紙の枚數

で2000枚(そのうち15パーセントほどはシングル・スペース)に達するものであるという。全巻は5篇から成り、

第一篇	序説	100 枚
第二篇	1790 年まで	500 枚
第三篇	1790 年 — 1870 年	600 枚
第四篇	1870 年 — 1914 年 (又はそれ以後まで)	650 枚
第五篇	結論 (最近における 理論的發展)	100 枚

という構成で、章別の細かい目次をみると、たえず經濟學の周邊の諸問題や歴史的背景などをとりあげながら、文字どおり網羅的に「經濟思想の分析的又は科學的側面の歴史」を説いたものであることが分る。第1篇から第4篇までは前後30の章に分けられているが、そのうち3章ほどが未完成または草稿の所在不明であるという。あと一息であったにちがいないこの大著の完成をまたずにシュンペーター教授が長逝されたことは、まことに残念であると云わなければならない。

なお、シュンペーター教授の遺稿 *The History of Economic Analysis* の目次は次のとおりである。

第一篇 序 説

- 第一章 本書の課題
- 第二章 われわれは何故經濟學の歴史を研究するか
- 第三章 經濟學は科學なのか
- 第四章 補論 I
- 第五章 補論 II
- 第六章 經濟學の社會學的考察

第二篇 古代から古典時代初期 (ほぼ1790年まで)

- 第一章 [草稿見當らず]
- 第二章 ギリシャ=ローマの經濟學
- 第三章 スコラ派の學者と自然法の哲學者
  - 1. 大きなギャップ
  - 2. 封建制度とスコラ學派
  - 3. スコラ學派と資本主義
  - 4. スコラ學派の社會學と經濟學
  - 5. 自然法の内容
  - 6. 自然法の哲學者たち

第四章 行政參畫者とパンフレティア

- 1. 社會史的背景
- 2. [無題]
- 3. 16世紀の制度
- 4. もろもろの制度, 1600—1776
- 5. 半制度的なもの
- 6. 再び財政學について
- 補論 ニートピアについて

第五章 計量經濟學者たち (並びにチュルゴー?)

- 1. 政治算術
- 2. ブアギルベールとカンティヨン
- 3. 重農學派
- 4. チュルゴー

第六章 人口, 収益, 賃銀と雇用

- 1. 「人口の原理」
- 2. 収益遞増・遞減と地代論
- 3. 賃銀
- 4. 失業と「貧民の状態」

第七章 價值と貨幣 [かなり長い章であるが未だタイプされておらず, 明らかに未完]

第八章 重商主義者 [節區分なし]

第三篇 (1790年から1860年まで)

- 第一章 序論と本書の骨組
- 第二章 社會政治的背景
- 第三章 思想的環境
  - 1. この時期の時代精神と哲學
  - 2. ローマン主義と歴史學
  - 3. 社會學と政治學: 環境主義
  - 4. 進化論
  - 5. 心理學と論理學
  - 6. マルクス前の社會主義

第四章 概観

- 1. 時代史を書いた人々
- 2. リカード學派
- 3. マルサス, シニオア, 其他

4. フランス
5. ドイツ
6. イタリア
7. 合衆國
8. 實證的な仕事

## 第五章 一般的經濟學

1. ジョン・ステュアート・ミルと彼の原理、フォーセットとケアンズ
2. 範圍と方法
3. ミルの讀者は實際何を學んだか
4. 經濟過程の制度的な枠
5. 經濟的過程の古典的な型
6. 經濟發展の古典的な考え方

## 第六章 [無題]

1. [無題]
2. 價值
3. 國際的價值の理論
4. セイの市場の法則
5. 資本
6. 分配の分け前
  - (1) 利潤
  - (2) マルクスによる利子搾取論
  - (3) 利子率下降にかんするマルクス、ウェスト、リカードの諸論
  - (4) 利子の生産力説
  - (5) 利子の節慾説
  - (6) 貸銀基金説、近代の集計分析の先驅者
  - (7) 地代
  - (8) 分配の分け前と技術の進歩

## 第七章 貨幣、信用、循環

1. 英國の問題
2. 基礎的な點
3. インフレーション論争及び正金支拂再始論争から
4. 信用の理論
5. 外國爲替と國際的金移動
6. 景氣循環

## 第四篇 [ほぼ1870年から1914年まで]

## 第一章 序論と本編の骨組

## 第二章 背景と幾つかの型

1. 經濟的發展
2. 自由主義の敗北
3. 政策論
4. 藝術と思想

## 第三章 隣接分野における諸發展

1. 史學
2. 社會學

## 3. 心理學

第四章 [章節いずれも無題であるが、歴史學派を取扱い、更に經濟學者の價值判斷について論ず]

## 第五章 この時代の一般的經濟學：人と學派

1. ジェヴォンズ、メンガー、ワルラス
2. 英國
3. フランス
4. ドイツとオースタリー
5. イタリア
6. オランダとスカンデナヴィアの諸國
7. 合衆國
8. マルクス主義者

## 第六章 一般的經濟學：その性格と内容

1. 周邊：一般的經濟學の社會學的外枠
2. 洞察力、企業、並びに資本
3. 價值論及び分配論における革命
4. マーシャルの立場と實質的コスト
5. 利子、地代、勞賃
6. [無題]
7. 應用分野における貢獻

## 第七章 均衡分析

1. この時期の經濟理論の基礎的な統一性
2. クールノーと教理「學派」：計量經濟學
3. 靜態論と動態論、決定性、安定性、均衡
4. 競争の假説と獨占論
5. 計畫の理論と社會主義經濟の理論
6. 部分分析
7. ワルラスの一般均衡理論
8. 生産函數

## 第八章 [草稿見當らず]

## 第九章 貨幣、信用、循環

1. 實踐的な諸問題
2. 分析的な仕事
3. 基礎的な點
4. 貨幣の價值：指數
5. 貨幣の價值：交換方程式と數量的な方法
6. 貨幣の價值：現金殘高の方法と所得的な方法
7. 銀行信用と預金の創出
8. 恐慌と循環
  - (1) 貨幣的な理論
  - (2) 非貨幣的な循環分析

## 附論 效用の理論について

## 第五編 結論：經濟理論における最近の發展 [節區分はない]

註 以上の目次はシュンペーター教授自身がすでに作成しておられたものであるが、[ ]の中はシュンペーター夫人による加筆である。